

松尾芭蕉について

有名な俳人である松尾宗房（後の芭蕉、1644～1694）は、1644年に伊賀で生まれた。土豪の次男であった。地元の大名家、藤堂良忠（1642～1666）の息子に仕えながら、芭蕉は連歌と呼ばれる連環する詩の形式に出会った。詩歌への情熱は、彼を江戸（現在の東京）へと導き、そこで俳人として生計を立てることを願った。芭蕉の才能は地元の先駆者に認められ、すぐに彼は「桃青」という名で弟子たちを指導した。

1682年、彼はバナナの木にちなんで「芭蕉」という俳名を採用した。後に彼の弟子たちは芭蕉にバナナの木を送った。

芭蕉は江戸の中心地で俳諧師活躍していたが、都会での生活をやめ、深川へ移り住んだ。ここでのわび住まいの中で自身の俳諧のあり方を模索するようになった。1682年に彼の小さな小屋が消失した後、2年後に芭蕉は旅をするようになり、これらの旅は伊賀への帰郷が目的であった。芭蕉の俳句の精神にふるさとは大きな役割を果たしている。

1691年、肉体的な病気と精神的な不安と格闘しながら、芭蕉は江戸に戻った。彼は執筆と旅行を続け、1694年に大阪で病気で亡くなる前に、伊賀と京都を訪れた。今日、松尾芭蕉は俳句の父として、文学の写実表現で影響力のある人物として記憶されているのである。